

身近なPFAS、がんの増加も

医療者の声を自治体に

相模原支部総会 記念講演

既報の通り、相模原支部（有機フッ素化合物）の由、生体に悪影響を及ぼす可能性があるため、処分が難しいPFASの結合力が強く化合物として極めて安定した物質であるが、PFASゴミの処理問題が生じているとした。特にPFASはヒトの体内から最終的な排出に40年以上かかること、PFASの血中濃度が高いことで、▽健康不安解消に向けて、検査可能な医療機関が増えてほしいと述べた。



講師の牛山氏

健康を守るため 関心を

最後に、医療者として何ができるかについて述べ、

の甲状腺疾患やコレステロール値の上昇、▽前立腺がんの増加―等の影響が指摘されているという。

続いて、PFAS問題の

世界と日本の現状について説明。本邦の各都府県の事例とともに、神奈川県内では相模原市や座間市等、米軍基地周辺の水質汚染を取り上げ、県民・相模原市民にとって身近な問題であることを伝えた。また、座間市の団体や牛山氏の所属する医療機関での血液検査（PFASの血中濃度測定）の調査結果を示し、県民の健康不安解消に向けて、検査可能な医療機関が増えてほしいと述べた。

事後抄録

歯科臨床研究会

歯科用ジルコニアの進化と 臨床活用ポイント

歯科臨床研究会は4月2日、歯科臨床研究会「歯科用ジルコニアの進化と臨床活用ポイント」を協会会議室とWEB併用で開催。講師は愛知学院大学歯学部歯科理工学講座・非常勤講師（教授級）の伴清治氏が務め、83名が参加した。



講師の伴氏

2005年にジルコニアが歯科医療用材料として国内で薬事承認を受けてから、約20年が経過した。こ

の間、ジルコニアは材料科

学の劇的な進歩とともに、

歯科修復治療における不可欠な主要材料として確固たる地位を築いている。初期

の3Y系は、その圧倒的な機械的強度を背景に、主にメタルフリー修復のフレイ

ムワークとして応用されてきた。しかし、その後の研究開発により、透光性を劇的に向上させた4Y系・5Y系や、天然歯の色彩を再現したマルチレイヤー構造が相次いで登場した。これにより、かつては困難とされた前歯部審美領域の冠修復からインプラント上部構造に至るまで、その適応範囲は飛躍的な拡大を遂げている。

一方で、ジルコニアの多

様化は、臨床現場における材料選択を複雑にしている。組成や結晶相構造の変化は、材料の強度や靱性の

は硬く、研磨に多大な時間を要する」という誤解が散見される。しかし、最新の術式と専用器材を適切に選択すれば、短時間で効率的

に鏡面仕上げを実現することが可能である。講演では、ジルコニアの材料科学的な変遷とその特性を整理し、特に臨床成功の鍵を握る「鏡面研磨」の意義について詳述した。適

切な鏡面研磨を施したジルコニアは、①対合歯の摩擦抑制、②機械的・化学的安定性の向上、③ブラーク付着の抑制、④周囲軟組織との良好な親和性、といった

極めて優れた利点を発揮することを紹介した。あわせて、長期予後左右する重要なステップである支台歯形成、接着、さらには再治療時の効率的な撤去方法についても概説した。本内容が、ジルコニアの特性を最大限に引き出し、より予知性の高い臨床を展開するための一助となれば幸いである。

*協会HPにて配信中

理事会だより

第32期第17回理事会 5月28日（木）

〈役員29名、出席23名（うちWEB3名）〉

【議長報告】
梅雨の走りと思われるむし暑い中、役員23名の出席により定刻どおり開会された。

事務局長による資料説明に続き、議題では、野本理事より4月度活動のまとめと最新の情勢につ

いて提案され、歯科におけるクロープ等の枯渇、価格上昇、またナフサの問題から歯科でも石油関連製品の出荷停止との報告があった。

国会では健康保険法改正案が衆院にて可決され、財務省の主張する医

療費削減と保険給付範囲縮小の流れが進みつつあると討論された。

各部報告では、政策部、學術部について湯淺副理事長、事務局・高橋氏より多くの報告がされた。その後、新聞部の主張2件承認、庶務事項もすべて承認された。

11議題と多くの提案があったが、役員、事務局の皆さんのおかげで定刻に終了した。

（議長・原〇）

主張 「一部保険外療養」は 凍結・廃止すべき

5月末、健康保険法等改定案が可決成立した。本法案に盛り込まれた「一部保険外療養」は、皆保険を根底から崩壊させる恐れがあり、到底認められない。

「一部保険外療養」は、保険給付の費用の一部（25％）を切り出して保険外とし、患者の実費負担とする仕組みだ。保険外併用療養費制度の新類型として位置づけられたが、患者の選択や申出に基づき保険診療と自由診療の併用を限定的に認める従来の同制度とは質が異なるばかりか、制度趣旨を逸脱している。

また保険外とする対象は厚労大臣の裁量で定める規定になっている。医療の給付・負担という国民生活に多大な影響のある内容を、国会審議なく大臣裁量で決定できる制

度は、国会軽視、民主主義の否定に他ならない。この間、「一部保険外療養」の適用範囲が国会審議の焦点となった。法案の条文上は全ての療養の給付が対象になると読

めるが、政府や厚労省は「薬剤（OTC類似薬）以外を対象とすることは考えていない」など、曖昧な見解を繰り返した。協会の追及もあり、その後の国会審議で厚労省

は「OTC類似薬」に付すなど、国会軽視と言わざるを得ない。本来ならその他の療養を条文から削除すべきであった。最終的に、厚労省は「薬剤のみを対象としたも

の」と法解釈の修正答弁をしたが、条文修正はされないまま可決成立となった。薬剤に限定すると確認するのであれば、条文修正が道理だ。

適用範囲が薬剤に限定する。保険料を支払っている。環境対策部と共催し、県内全会員に向けて開催した。*協会HPにて配信中

と感しているといい、自身S汚染問題に関心を持って自身の健康だけでなく、国民の健康を守るという視点でも、医療者としてPFANaお、同記念講演は公書

と感しているといい、自身S汚染問題に関心を持って自身の健康だけでなく、国民の健康を守るという視点でも、医療者としてPFANaお、同記念講演は公書

と感しているといい、自身S汚染問題に関心を持って自身の健康だけでなく、国民の健康を守るという視点でも、医療者としてPFANaお、同記念講演は公書

魚類実態調査記者会見

少ない検体数でも X線異常

公害環境対策部は6月2日、野本部長が2025年度魚類実態調査の記者会見を横須賀市政記者クラブにて行った。当日は共同通信社・中日新聞・毎日新聞の3社が会見に応じた。

野本部長は調査で見られた骨曲がりや経年変化、重金属分析について解説。市民の協力を得て釣れたマハゼ4匹のうち、ヴェルニー公園・長浦湾・鶴見川のいずれにおいても、外観異常は見られなかったとした。レントゲン検査では、X線異常が4匹中4匹に見られ、「現在は鶴見川の汚染が進んでいる。近年は外観異常が見られる魚は減少しているが、本来、魚の外観異常はほとんど無いのが普通である。少ない検体数でもX線異常があり、環境汚染が窺われる」と主張した。

記者からは「汚染度が高いとのことだがどのくらい高いのか」、「汚染度の高さを強弱が分からないが、表現するとしたらどうなのか」などの質問が寄せられた。



会見する野本部長

活動報告

quick reports